

Title	竹中生誕譚の源流
Sub Title	On the origin of "Bamboo-Princess" story
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1951
Jtitle	史学 Vol.25, No.2 (1951. 11) ,p.1(128)- 46(173)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19511100-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

竹中生誕譚の源流

松本信廣

—

ごく素朴な考へ方をする論者は、我日本の文化をもつてシナ又は印度文化よりの借用をもつて成立するとなし、此兩要素を除去すると後に殘る分子はとるに足らぬと考へてをる。然しかような思考はアジアの文化の本質に對する知識の鮮少さより起因するのであつて少しく日本及び周縁文化の本質に思ひを致すれば今日かような考へ方は餘程批判を容れる餘地がある。成程我國文化の形成にシナ及び印度文化が壓倒的な影響を與へたことは事實である。然しながらよくシナの儒教が我國徳教の中心となり、我國家制度の發達に並々ならぬ影響を與へたとは云へ、儒教の儀禮的表現なる孔子廟の祭典の如きは我國に於ては殆ど例外的にとり行はれたるに過ぎず、沿々たる佛教信仰の傳播も成程我民族の思想に甚大な感化を與へたとは云へ、神佛習合の如き妥協的形式の本に我國固有宗教たる神道の勢力を消し去ることが出來なかつたのである。言語的に云つてもシナ語の借用は我國語の重要な語彙を壓倒するに至つてゐない。例へば我民族の根本、的生活資料たる稻を呼ぶ名稱イネは、もし我國人が一も二もなくシナ文化の前に屈伏してゐたならばシナ語の稻^{トウ}taoと、

云う名稱を借りて呼ぶべきであるのに我國人は之をなほイネと呼んで依然改めなかつたのである。我國固有のものは兎に角、我國に存しない外來動物の名稱となると之を輸入した國の名稱をもつて呼ぶのが例であるが「象」の如き外來動物の呼稱を我國人は古くキサと云ふ名稱で呼び、象 *hsiang* とは呼ばず、また「虎」の如く我國に棲息せぬ動物を決して虎 *hu* とは呼んでゐないのである。これは我民族が有力なシナや印度文化を受け入れる前から更に別種のより古き原初文化に培はれてゐたことを語るものであり、これが我國俗の基盤をなし、案外に外來勢力の侵入に抗して今日まで保有されてゐたのである。思ふに東アジアに於てシナ文化が今日の如く擴大せざる以前恐らく此大陸の北方には古アジア族が今日よりも廣き分布圏を持ち、その南にはツングース、モンゴル等の諸族が擴り、その更に南には今日シナの西南地方に追ひこめられてゐる苗蠻族を始めタイやモン・クメル族の祖先が中部山地から海岸線に至るまでの廣大な地區を占領してゐたことと思ふ。同じことは印度に於ても云はれるのであり、ヒンデウクシの山脈を越えて印度平原にアーリヤ人が侵入する前から印度平原にはモン・クメルと並々ならぬ關係があつたと考へられるムンダ族がドラヴィダ族と共に可成の發展をなし、高度の文化を營んでをつたのであり、シナ文化にしろ印度文化にしろかういふ各種の原初的文化要素を基盤とし之を綜合させて成長した複雜文化であり、之を分析すると案外アジア在來の原初文化、及び之に四邊より早くから流れ込んだ外來文化の諸要素の演じた役割の並々ならぬことが看取されるのである。吾々の知悉するシナや印度の歴史時代が始まる以前から既に久しい間種々なる文化の起伏消長のあつたことが推察される。

かういふ原初文化の中自分が殊に興味を持つて研究してゐるのはモン・クメル族によつて代表され、曾つてはインドシナから印度にかけ、廣大な地域を占領し、恐らくはシナの南方に發展してゐたと考へられるオーストロアジア語族

の文化である。今日でこそ北部より侵入したタイ・シナ・ビルマ諸族の爲寸断せられ、海洋中の孤島の如く點在してをるに過ぎぬが昔時は重要な勢力を持ちしものの如く、殊にその影響下に成立したと考へられるオーストロネシア語族は南太平洋一帯に弘布し、その西端はアフリカ近くまで、東端はアメリカ大陸の近傍まで及び、その分布圏の廣大なことは他の語族に比類なき盛觀を呈してゐる。

一體オーストロアジア語族の發源地が何處であるかの問題は人によつて説をことにしてをる。ショミット師の如きは印度を本源地としてゐるが最近の學說は印度に於けるオーストロアジア語族の勢力を寧ろ東より西へ侵入して來たものであると説く傾向が強じ。ショミット師はまたその有名な『中央アジア及びオーストロネシア兩種族間の一聯鎖、モン・クメル族』 Die Mon-khmer Völker, ein Bindeglied zwischen Völkern Zentralasiens und Austronesiens, (Braunschweig 1906) の表題の中に明かに此オーストロアジア語族をもつてアジア内奥地の種族の言語と海洋に擴つた南方系言語との間の一聯鎖だと認めてゐる。即ちオーストロアジア語族發源の地域は中央アジア民族との隣接地であると考へられ、それが印度でないとすれば結局シナの南方からチベット中央高地にかけての地帶がインドシナ侵入以前のオーストロアジア族の住地であつたのではないかと推定せられる。かうして更に問題となつてくるのは彼等の北方に隣接して居住してゐたタイ・シナ・チベット・ビルマ語族との關係であり、更に此等の諸語のそのまた北に擴つてゐたアルタイ又はウラル系の諸語との關係である。今日の言語學の狀態では的確にその相互關係に就て學術的批判を下し得ぬがアジアの北方系と南方系との連絡は從來の世人の考ぐる如くしかくかけ隔てるものに非ず、かつては案外に相互に親密な關係にあり、遠く遡れば東洋民族の起源が一なりしことを證することが可能に非ざるやを豫測せしむる節がある。

自分は從來オーストロアジア語族を初めその他のインドシナ語族が曾つて東亞に於て北方にまで勢力を及ぼし、我國語の重要な語彙が其影響を蒙ることに就て屢々所見を公けにした。例へば我國のイネと云ふ名稱は安南語ネップ、チャム語ニオプ、クメール語ノップ、セダン語ニアン、バナル語ナン等と關係あり、ネと云ふ語根に接頭辭イが附せられたものと考へられる。象を指すキサと云ふ名稱は、オーストロアジア語系のルメット語ケサン、クメール語クチンに類例を見る様に、オーストロアジア・タイ等の語系に共通な象を指すサンとかチャンとかジャンとか云ふ語根に ke の如き接頭辭が添加せられ、更に終尾の鼻喉音が脱落した形と云へる。虎を指すトラと云ふ名辭も徳川時代の我國々學者は人を捕へるからトラと云ふのだと云ふごく民間語源的な解釋で甘んじてゐたが、實はオーストロアジアやロロ語系に見られるラとかロと云ふ虎を指す語根と同じくチベット語系、苗、タイその他南シナ居住民のトと云ふ虎を指す語根との複合體と見らるべきではないかと推定せられ、例へば廣西の獮族の使用するクタイランとか東京カ・コン族の使用するチャラ、雲南ムン族の呼ぶ土弄 t'u lung などと云ふ名稱との類似が注意される。⁽¹⁾

自分の推定する所によればシナ文化が黃河流域の一局部より次第に擴つてシナ全土に及ばざる以前山東半島より淮水、揚子江の流域にかけてはシナ民族ならざる、予の所謂夷蠻文化、西人の所謂前シノア文化なるものが分布してをり、海を隔てて海島上に存したる我國文化はかかる文化の影響を多分に蒙つたと信ずるのである。またシナ文化それ自身も黃河流域より發展して漸次揚子江、淮水流域地帶に及ぶに從ひ、此等の原住民文化を吸收し、之と同化して今日の大をなしたのであつて、吾々の云ふ所謂「シナ文明」は決して單純なるものに非ず、北方、南方はた又西方より流れ込んだ文化がいろいろに組みあつて複雜多様な形相を現出してゐるのである。

海を隔てて我日本は大陸シナより文化を借用したが政治的に其支配を受けたことなく、太初以來比較的其純真なる原初文化を持ち傳へてをる。此文化こそは太平洋周縁のアジア古代民族がシナや印度の後期文化によつて複雑化しない以前から保有してゐる純粹素朴な原始アジア文化の繼續發展せるものと云ふべきであり、アジアの本源的姿を偲ばせるものと云はねばならぬ。その意味に於て我國の古典としての『古事記』なり『日本書紀』なりは吾々にとつて單に日本古典として價値あるのみならず、またアジアの古典としても意義あるものと云はねばならぬ。

論者は古事記は兎に角『日本書紀』にはシナ的影響が多いことを説く。成程後者が漢文體をとり、シナ的潤色の色濃いことは事實である。然したとひシナ的よそほひを借りたと云つてもそれはもともと同質的なものが我國にも存し、その表現の技巧をのみ借用した場合が多いことも忘れてはならぬ。即ち我國固有文化と同じ基盤の上に成長し、唯より精巧な形相をとつたものを外的表現の方法として借用した場合が多いのではなからうか。

例へば『書紀』の開卷冒頭にある次の文句、「古天と地といまだ剖れず、陰と陽と分れざりし時、渾沌りたる鷦の子の如く、くごもりて牙を含めりき、その清陽なるもの薄磨きて天となり、重濁れるもの淹滯りて地と爲りき、精妙なるが合ひ搏ぐは易く、重濁れるが凝りかたまるは難ければ、天先成りて地後に定りき。然ありし後に神聖その中に生れ給ひき。云々」とあるのは吳の徐整の作とせられる『三五曆記』とか『淮南子』天文訓の宇宙開闢論其儘であり、書紀の作者が之を原文の儘踏襲せることは既に先人の指摘せる通りである。然しながらシナの此等の理論が學者の思辨から生れた抽象論でなく、本來民衆の間に存したフォーエクローラから發達したものであらうとは津田左右吉博士が其「支那の開闢説話について」(『東洋學報』第一卷五二九一五四六)の中に述べし所であり、博士は三五曆記の後の方の説話に見

ゆる、天地の開けた初めには其間の距離が極めて近かつたのが、漸次遠ざかつてゆき、それと共に其の中間にゐる盤古の身長が其距離だけ伸びてゆくと云ふ筋をニュージーランドのマオリ族の間に行はれてゐる父なる天と母なる地とが密着してゐたのを其間に生まれた子が強ひておし開いた説話に比較されてゐる。自分の考へでは天地未成の時の状態を鷄卵の形態にたとへたのも單なる學術的理論たるものではなかると思ふ。卵子が創造の本源の象徴であり、萬有の質的基因であり、その中に陰と陽、死と生との二元を包括してゐると云ふ考へ方はギリシア、ローマの古典宗教にも存してゐたことはバホフエンの「象徴としての卵 Das Ei als Symbol (J. J. Bachofen, Mutterrecht und Urreligion, Leipzig, 1921)」の中に指摘されており、同種の思想は印度、エジプト等にも存し、また種族の祖先を卵子より誕生すると考へる神話は滿洲、蒙古、朝鮮、シナ、インドシナ、南洋等に擴つてゐる。かういふ共通觀念を前提として恐らくは宇宙の創成を鷄卵に比喩する考へ方が生れたのであり、シナ人の初期宇宙觀の基く所は人類の共通普遍な殊に東亞に於て普通な思想であると考へられる。たういふ素材をシナ民族の獨特なる才能が理論めいた叙述に改造したものと考へられるが、記紀の作者がシナ書から此等の叙述を採用しても結局これを日頃から抱いてゐる口れの思考の代辯者として採用してゐるに過ぎない場合が多いのではないか。ことに古代日本に於て修史その他文辭に關係ある方面的擔當者は朝鮮からの移住者の子孫であつたと推測せられるので、朝鮮に卵生傳説の多い所から云つてもかやうな想像は必ずしも無理ではなからう。此點は記紀のシナ的潤色を論ずる場合に特に注意すべき點かと思はれる。

『書紀』ではかくて天地の中に生れた一物を葦牙の如しと形容し、之を國常立尊と云ふ名で表してゐるが古事記では

之をウマシアシカビヒコヂ神と申してゐる。前に既に述べた所であるが自分の考へでは、我國創世神話は植物發生の状に宇宙の生成を擬へる點に於て、同じく之を樹木の生長によつて表はすニュージーランド・マタテウア族の神話などと比較さるぐるものがあると思ふ (Elsdon Best, Maori Religion and Mythology, Wellington, 1924, p. 35)。モオリ族神話に通曉したエルスドン・ベストが認める如く此宇宙の生成を樹木によつて比喩する方法は外の國にも例があり (ibid., p. 36)。日本神話も此點人類共通の思想に根ざしてゐる事は論はない。然しながら此日本の神話をもつて試みに漠北蒙古の神話などと比較した時何人もその心的傾向の顯著な相違に驚くであらう。即ち蒙文秘史によると「上天より命ありて生れたる蒼き狼ありき。その妻なる憶白き牝鹿ありき。チンギス(海又は大なる湖)を渡つて來ぬ。オナンムレン(オナン河)の源にフルカンカルトン(神が獄)に營盤して生れたるバタチカンありき」とあり、種族の祖先を狼と鹿との間より生れたる者と觀するのであり、之を植物の生長により宇宙の生成を説く神話と比較すると格段なる差違が見出だされるのである。即ち人類思想の普遍性は認められるが地球上その地的環境を異にするにつれ、各々異りたる形相を顯示することを忘れてはならぬ。内奥アジアの沙漠地帶に居住する遊牧民族にあつては動物に對する異常な親愛崇敬の念は彼等の種族の祖先をもかくの如き動物にかづけんとする心理を抱くに至つたのではなからうか。之に反して東南アジアの如き卑濕の地帶に於て農耕に早くから從事してゐた民族は同時に極度に繁茂する植物の景観に接し、之を崇拜畏敬し、宇宙の生成を植物の生長に比喩したり、その種族の出自を植物にかづけんとしたのではなからうか。植物の種子が地中より芽生える過程は彼等をして全ての物質の起原を同様な理由によつて説かんとする心的傾向に導いたものと考へられる。早くから農耕に携つてゐた東南アジアの蒙古系種族の間に北方アジアの同系種族と違ひ、植物崇拜の念が顯著に發達し

來つたことは一つの地域的特殊相として考へてよからう。

二

かういふ意味に於て自分は東南アジア神話中に植物の發生をもつて宇宙の創成を表したり、或は祖先を植物より發現したと認める傳説の存在するのは當然のことではないかと考へる。例へば一例として我『竹取物語』の發端たる竹の中から人の生れてくる物語を考察してみよう。『竹取物語』は平安朝の文學的作品であり、種々なる大陸文學の影響を蒙つてをることは云ふまでもない。然しながら此物語が全部外國種である譯ではなく、本來の日本傳説が素材となり、それに作者の取入れた外國材料が程よく混和されて、一つの物語を形成したのであると考へられてゐる。⁽²⁾

今其原文を擧げると次の如き形である。

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、よろづの事につかひけり。名をば讚岐の造麻呂となむいひける。その竹の中に、本光る竹なむ一筋ありけり。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いと美しうて居たり、翁いふやう（われ朝毎夕毎に見る竹の中におはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なんめり）とて、手にうち入れて家へ持ち來ぬ。妻の嫗にあづけて養はす。美しきこと限なし。いと幼ければ籠に入れて養ふ。

かういふ『竹取物語』の本文の傳へと少し異なるのは鎌倉時代の『海道記』や『古今集註』、室町時代の『和歌百首註』『三國傳記』『臥雲日件錄』、江戸時代の『國名風土記』などに見える竹林の中に鶯の卵あり、その一が孵りて美しき姫

となつたと云ふ筋であり、單に竹から出生したと云ふのみならず、之に鶯卵よりの出生の傳へが附加されてゐるのである。

從來の學者は『竹取物語』の類話としてまづシナの夜郎國の竹王傳說を擧げるのを常とする。夜郎國は今の貴州省西北部に今から二千年も以前に存在した原住民の國である。今『後漢書』第七十六卷西南夷傳に見ゆる其傳說を擧げて見るに、

夜郎は、初め女子あり、遜水に浣ぬるふ。三節の大竹あり、足間に流れ入る。其中號聲あるを聞く。竹を剖いて之を視る一男兒を得、歸りて之を養ふ。長するに及び才武あり、自立して夜郎侯となり、竹を以て姓となす(『華陽國志』に見ゆ)。武帝の元鼎六年南夷を平げて牂柯郡と爲す。夜郎侯迎へ降る。天子其王に印綬を賜ふ。後遂に之を殺す。夷獠咸竹王血氣の産む所に非ざるを以て甚だ之を重んず、爲に後を立てんことを求む。牂柯太守吳霸以聞す。天子乃ち其三子を封じて侯と爲す、死して其父に配食す、今夜郎縣竹王三郎神あるは是也。云々

また『水經註』卷六にも同様の傳說を錄してゐる。

鬱水は即ち夜郎豚水也、漢武帝の時、竹王あり、豚水に興る。一女子あり、水濱に浣ふ。三筋の大竹あり、流れて女子の足間に入る。之を推せども去らず、聲あるを聞く、持ち歸りて之を破る。一男兒を得。遂に夷濮に雄たり。竹を氏とし姓と爲す。損つる所の破竹、野に林を成す。今竹王祠の竹林是也。王嘗つて人を從へ、大石上に止まり、命じて羹を作らしむ。從者水無しと白す。王剣を以て石を擊ち、水を出だす、今の竹王水是也、後唐蒙牂柯を開き、竹王の首を斬る。夷獠咸怨む。竹王血氣の生む所に非ざるを以て、爲に祠を立てんことを求む。帝三子を封じて侯となす。死する

に及び父の廟に配す。今の竹王三郎祠は其神也。

『華陽國志』卷四にも水經註とほど大同小異の傳説が錄されてゐる。

此夜郎國の傳説をもつて我國の『竹取物語』がよつてもつて發生したシナ的要素であると斷ずるのは早計である。何故ならば此夜郎國を形成した人種はシナ人ではなく、シナ人以前に東南アジアに居住した原住民であり、かういふ信仰はシナ文化以前から此地帶に存してゐたものと考へられるからである。そして夜郎國の説話を錄したシナ書が傳來する以前から此種の傳説は東亞に流布し、我國にも行はれてゐたと考へられる。例へば竹中より生誕する物語のマライ半島に於ける類似傳説は、スキート・ブラグデンの大著『マライ半島の異教種族』中にマントラ族の例が採錄されてゐる。

カティブ・マリム・セルマンと云ふ人物が或時美しい御姫様を追ひかけて山の中にやつて來た。そして食物を求めて得られず、一尋も幅ある大竹の傍で眠つた。夜の間彼の尋ね求めた御姫様が現れて彼の爲に食物を調理し、曉と共に消え失せてしまふ。カティブは御姫様の教へて呉れた通り其大竹を切り割つて御姫様を見つけようと骨折るがその持つてを山鉈でも手斧でも鑿でもどうしても断ち切れない。最後に檳榔割りの鋏をもつて竹のいたゞきの芽に楔を入れそれからうまく下へ割りひろげてゆき、逸に幹の中から御姫様をとりだす。かうして一度と消えてなくなることの出来なくなつた御姫様は馬にかき乗せられ、多くの從者にまもられ、夫と共にブキト・ブラジャに連れてこられる。其處で二人とも姿を隠してしまふが現在まで彼等は現世人の目に觸れずに生存してをり、其立派に裝つた馬が時々氣候の好い時に望見される。香を燃して之に願をかけると出現して、どんな願ひでも叶へて呉れ、また姿を消すと信ぜられてゐる。姫は容色美はしくその毛は純白で長さ七尋であると云ふ。(Skeat and Blagden, Pagan Races of the Malay Peninsula,

vol. II. pp. 334—344).

同じくマラヤ半島のネグリト一族なるセマン族の物語として次の如き話が録されてゐる。

ジョホールのラジャの一人の高官ナコダカシムと云ふ者が流されて、セマンの村に來り、滯在してると或日セマンの酋長の二人の娘が甘蔗を割らうとして相争ひ、はずみで一人娘の手を小刀で斬り、乳状の白い血が流れ出るのを見る。之を見てナコダは其娘を貰ひ受け、之を女房としてセマンの間に住むが一向に子供が出來ぬ。或日妻は川に水浴に行き、生れたばかりの赤児が苔の床の上に寝かされ、竹の筏で流れてくるのを拾ひ上げ、自分の子として養ふ。丁度其頃ペハーンのラジャの親戚でトヒドンといふ者の飼犬が毎日同じ時刻に夕日の方角に向ひ吠える。そこで犬の鎖を解くと犬は、七、八日走り續けてヤンユップと云ふ所に來り、ある竹藪のまはりを吠え廻はる。そこでトヒドンが小刀で、其竹の一つの莖を切ると其中から男の子が現れた。トヒドンは之をとり上げて旅行を續け、セマンの所に來り、ナコダカシムに遇ひ、その後一人の子供は相結婚する。其子孫が種々の經緯を終てペラクの王家となる。云々(スキート・ブラグミン前引書二卷二二〇頁)

竹姫の物語はスマトラの『ペセイ王史』の中にも見えてゐる。此歴史の馬來語原典は一八四九年デュロウリエによつて公刊され、その佛譯はアリストイド・マルにより一八七四年巴里で出版されてゐる。今之により其初めの部分を抄譯して見よう。

ペセイ國にマホメット教を輸入した最初の人物はアーメッドとモハメッドと云ふ二人の兄弟の王様である。二人の君主はスムルランと云ふ都邑を創建しようとし、弟のモハメットは兵卒を連れて森や藪を切り開かうとした。森の眞中に

非常に太いベトンと呼ばれる種類の竹の藪があり、兵卒がその莖を切るとまた新たに芽生えする。其處で王様自身出馬してこの竹を根絶しようと勉めてゐると此竹藪の丁度中央に膨んだ人間の體の様な筈があるのを見つけた。之を切らうとする中から極めて美しい女兒が現れる。王は獵刀を投げ棄てて急いで子供を抱きあげ、之を家に連れ歸つた。子供を伴れて戻るモヘメット王を見て王妃は驅けより、之を其手から受けとり、愛らしい女兒なるを見て、夫婦相共に欣喜し、早速此姫を竹姫（ベトン姫）と名づけ、之を王の一族として取扱ひ、乳母、傳育係の女官をつけ、調度品一切を揃へる。王は竹姫を此上なく鐘愛し、姫は大きくなるにつれ、益々眉目美しくなつて來た。アーメッド王は弟の竹の中に姫を見つけたと云ふ話を聞き、妃と共に之を見に來り、乳母に抱かれた女兒の美しいのに感嘆する。

かくて宮殿は落成し王は此處に居を移したが暫くして兄のアーメット王は更に弟の居城から一日程ばかり離れた森の彼方に新邑をつくり、其處に居を占める。或日原始林中に狩に出たが一匹も獲物が捕れぬ。然し此原始林中に小禮拜堂のあるのを發見し、その中に一老人を見つける。アーメッド王は之に挨拶をし、彼に弟王が竹の中に姫を見つけた話をすると、老人が（もし子供が欲しいなら少しの間此處に待ちなさい）と云ふ。暫くすると非常に大きな象が現れ、その頭上に一男兒を坐せしめて見る。象は其兒を河の中に水浴させ、それが終ると之を河岸に置き、今度は自分で水浴し、それから兒を頭上に載せて森の方に向つていつた。アーメッドは之を見て大變悦び、一旦宮殿に歸り、兵隊を集め、之を引連れてまた森の中に引歸して來た。すると今度は小禮拜堂もその中にあるた老人の姿も消えてなくなつてをる。金曜日が來ると象は森の中から出て頭に載せた男兒をいつもの所で水浴させ、次いで之を河岸に置き、今度は自分で水浴をする。その時地に穴を掘つて隠れてゐたアーメッドがいきなり躍り出で、兒童をかゝへ、急いで之を連れ戻る。象が之

を見てアーメッド王を追跡し始めると兵卒は直ち投槍で之を追ひ拂つて来る。かくてアーメッド王は全軍隊を連れ、宮殿に還幸し、象から奪つた男兒は王妃の手に無事手渡しされた。男兒は容貌美はしくマラー・ガジャ(ガジャは象の意)と名づけられた。此一人の小兒は次第に成長し、夫婦となり、二人の間にマラー・ジル、マラー・クスマと呼ばれる一人の王子が儲けられた。⁽³⁾

所が竹姫の頭の眞中に金色の毛が一本生えてゐる。此毛は姫が香油を塗らぬ時は人目につかぬが、たまたま姫が香油が塗つてゐる時夫の王子の氣づく所となり、王子は之を抜かうとする。すると姫は、もし此毛を抜けば夫婦は分れ分れになるからと云つて夫が幾度申し出ても拒否する。或日竹姫の眠つた時、マラー・ガジャはこつそり此毛を抜いてしまふ。所がたいしたことないだらうと考へてゐた所思ひもかけず、白血がどんどんとその毛穴から止度なしに流れ出し、そのはてに姫は死んでしまう。姫の育ての親なるモハメット王は之を聞いて烈火の如く憤り、マラー・ガジャを殺してしまふ。また之を聞いた王子の育ての親アーメット王も大變に激昂し、兵を連れてモハメッドを攻撃し、大戦争の結果二人の王は戦死してしまひ、マラー・シルとマラー・クスマの二人の王子だけが生き残り、ブルアンと云ふ所に赴き、新しい國を建設した。Mare (Aristide Mare, Histoire des Rois de Pasey, Paris, 1874, pp. 13—22. なほ宮武正道『マレーの竹取物語』[明治聖德記念學會記要第四十九卷昭和十三年春季]、『南洋の言語と文學』昭和十八年四月一九五一—一九八頁参照。)

同じ様な竹中生誕の話はスマトラのダイリ・バタク族の間にも採録されてゐる。

天なる神バタラグルの妃妊娠してその安産の薬として牡の孕み鹿を欲しがつた。そんなものはどうしても見付け得ないので神はほどほど閉口する。再度狩に出て目的物を見つけかねた下僕のヘジグルは最後に鳥に命じ國中を隈なく捜索

せしめる。鳥はふと非常に深い穴を發見し、其穴の深さを知らうとし、藤蔓を下したがなかなか底に著かぬ。そこでそばにある手ではかることの出來かねる太い一筋の竹を投下したが之も底まで達したらしい音をたてぬ。そこでハジグルは鳥を穴の下にやつて事情を窺ふことにする。下界はまつぐらで水びたしであり、鳥はとまる所に困つたが幸ひに上から投げ下された竹があつたので其上に休んだ。ハジグルの方はいくら待つても鳥が歸つて來ないのでバタラグルの所にすごすご歸る。委細を聞いたバタラグルは従者と一緒に下界に下り、迷兒になつた鳥を探さうとする。その際彼は一握りの土を持参する。下界で鳥と逢ひ、其願ひによりバタラグルは下界に光明を與へる。彼は伴ひ來つた牝羊をかゞませ、其頭上に木片を置いて筏を組み、其上に天上から持つて來た土を敷いて大地を造つた。其後彼は天からまた赤い土を持つてこさせそれで一對の人間を造り、之に農耕、料理、服飾其他一切を傳授し、日月を造りあてがふ。

或日神のつくつた人間の女が川で水を汲んでゐると竹の一筋が水入れに附著してどうしても離れぬ。女の叫聲に驚き夫と一緒にやつて來た鳥は此竹が曾つて自分が天から投げ下した竹であることに氣附き、之を二つに割らせると中から一人の小兒が現れ、成長して立派な男子となる。彼は神のつくつた男子にその女子を譲つて呉れと交渉して容れられず、紅い果實と變形し、女の腹中に入り、小兒と生れ變る。此子供はバタラグルによりナッピセタンと命名され、夫婦の生んだ實子の方はナッピハジと名附けられる。

其後夫婦は更にナッピムフマットと云ふ男兒とブルアラフンと云ふ女兒とを分娩し、後此世を去る。ブルアラフンと云ふ娘が大きくなると竹から出たナッピセタンが之を妻とする。兄弟のナッピハジが同胞結婚の罪を難詰すると彼は自分がもと紅い果實と化して母の體内に入り、子供と變形したもので實は他人に外ならぬと返事する。かくてブルアラフ

ンは二人の女兒を生み、之がナッピハジとナッピムフマットの妻となり、各々新しい村をつくつた。ナッピムフマットからマホメット教徒が、ナッピセタンから歐洲人が、ナッピハジからバタク族の祖先が生れた。云々 (W. Munsterberger, Ethnologische Studien, An Indonesischen Schöpfungsmythen, Haag, 1939, S. 64—72)。

フィリッピン島の土著人もその始祖が竹から生れたと傳へてゐる。曰く、

スルー土人の口碑によると、大昔、何所からともなく、一隻の小舟が漂着し、其舟の周圍に塵埃が附着して、それが次第に凝固して、今日の所謂ホロと云ふ島を形成したものであるといふ。當時、人類といふものは、一人も住まず、生物も居らず、ホロ島以外には島といふものは一つもなかつた。所が、此時一羽の大鳥が此島に飛んで来て一個の卵を産落して行つた。此時シナから一人の貴人が船に御姫様を乗せて、島の南端に碇泊してゐた。所が惡魔が來て、御姫様を攫つて行つて竹林中の竹の節の中に隠して置いた。島の北岸に産み落された大鳥の卵は自然に孵つて、中から一人の男の兒が產れ、日増に成長して獨り淋しく暮してゐると、或日母鳥が飄然と島に降りた。男の兒は、母鳥に何處かへ伴れて行つて貰ひたいとせがんだが許されなかつた。母から形見にと一本の腰刀を貰ひ、母に伴れられて、島の南へ行つてみると、そこに珍しく大きい一本の竹が生えてゐた。母は此竹を切つて見よと子供に命じ、腰刀を抜かせて、竹を切らせると、中から一人の御姫様が現れた。茲に於て一人は夫婦となり、今のスルー王家の始祖となつたといふのである。

タガロ族もフィリッピン人の祖先は竹の節の中に育つた一對の双兒であると云つて居る。サマール族、マギングダナオ族、ラナオ族、及びボルネオや馬來半島の諸族も亦人間は鳥から生れ、竹の中で育つたと云ふ右の話と同じやうな神話

傳説を持つてゐる。

ミンダナオ島に於ける先住民族は、マノボ族であり、スルー島には、曾つてゲヌン族と云ふ一族があつた。マノボとブダヌンとは同族であるといはれ、共にモロ族の始祖であるともいはれてゐる。マノボとは、生れて育つたと云ふ土語であり竹の中に育つたといふことを意味する。云々 (『ミンダナオ島の研究(一)』五一—五二頁、南洋經濟研究所『研究資料』一年九號、昭和十三年九月所載)

同じ様な話は臺灣の高砂族の間にも多く分布してゐる。三品彰英氏は、其『日鮮神話傳説の研究』(昭和十八年、柳原書店發行)の巻尾に「かぐや姫の本質」と云ふ論文を附載し、其補遺に總督府の調査報告、及び佐山融吉氏『生蕃傳説集』から其類話を摘出されてゐる。即ち臺東廳ブニマ族卑南社では太古パナパナヤンにヌノル云ふ神人地中より生れ、一本竹を土中に挿したが其上節からパグマライ(男)、次節よりパクムシル(女)が生れ、兩人夫婦となり、蕃社の祖先となつたと傳へ、又タイヤル族は自分等の祖先は大いなる石から生れ出たが、シナ人は竹より生れ出たと云ひ、昔何處よりか一人此地に來り其子孫を繁殖せしめんと欲し、ブタクカン(刺竹)を數節に伐り、各片を地に挿し、後己の身體を斬つて血を出し、之を其竹に灌いで死した。其竹成長した後、破れて各節の間より數多の人を出し、シナ人の祖先となつたと傳へてゐる。卑南族卑南社では太古パナパナヤンと云ふ所に一柱の女神が出現し、右手には石を持ち、左手には竹を持つてゐた。其名をヌヌラオと云ひ、其持てる石を投げると石割れて中より人間が出で、此者長じて馬蘭社の祖となつた。また持てる竹を地に樹てると上の筋よりパコシセル(女)、下の筋よりパコマライ(男)と云ふ二神が出、之が卑南社の起源となつたと云ふのである。またパイワン族ダス社の傳説では昔ビナブカサンと稱する所に一本の竹が生

えてゐた。成長と共に中に水溜つて遂に其竹を割つたが中より四個の卵がころがり出した。晝太陽の光線の當る間は互ひに離れてゐるが夜間は相接して居た。かくて數日の後其中より蛇の形をした男と女とが出現したと云ふのである。之と似た話はパリヂヤリヂヤオ蕃の傳説として物語られてゐる。即ちピューマ社のピナバオカサンと云ふ所にある一本の竹から靈蛇が現れ、化身して男女となり、二人の子を生んだと云ふのである。

ミクロネシアのバラウにも竹に關する傳説がある。天に昇つた三人の男が神の家にとめられ、外を見てはゐけないと云はれた窓から外をのぞいて故郷の景色を觀、一途に歸り度くなる。神は三人を大きな竹の節の中に入れて天から下に投げ落した。竹はガルケユックルの前の海に落ちる。村の者が此流れ竹を見つけて斧で割らうとすると、中から聲がして、靜かに割つてくれと云ふ。村の者はびつくりして手を引き、今度は丁寧にそつと割つて見ると、中から三人の男が出て來たので、此三人の天から降つて來た者を村の長老にした。その割つた竹は流れてガラカベサンの島に着いたので、ガラカベサンは今の様に澤山の竹が生えたのだと云ふ。(土方久功『バラオの神話傳説』昭和十七年、大和書店、一六五)

一六七)

また昔ア・イルブンに女竹群があり、夜になると其竹から人間共が澤山出て來て、ハラップの村中で互ひに喧嘩をし、あたり中を血だらけにするが、朝になると誰も居ない。或時ハラップの男達が魚獲りに出かけた留守に、見知らない人間が澤山出て來て、互に血腥い喧嘩をするので、残つた村の女達は皆恐れて森の中に逃げかくれた。そこで今度は男達が相談をし、魚獲りに出た振をして二手に分れ隠れてゐると女竹の人間共が村に出て喧嘩を始めたので男共は早速兩方から出て追ひかけると人間達は皆ア・イルブンの方に逃れ、女竹の裂けた中にどんどん入つてしまつた。そこでハラッ

の者は竹藪を掘り起して海の中に流してしまつたと云ふ。(圖上、一八三、一八四頁)

III

『竹取物語』に見ゆる竹中生誕譚を從來の學者は印度に於ては『廣大寶樓閣善住秘密陀羅尼經』序品に見ゆる三仙人の地に沒した跡に三竹を生じ、その各々に一童子を生じたと云ふ話、及び『佛說秦女耆域因緣經』に柰(ナシ)(カラナシ)と云ふ果樹の瘤節が出來、それが成長し、更に其中から一本の枝が出て偃蓋の如く繁茂し、その中から美しい一女兒が生れ出たと云ふ話などに比較してをる。成程かういふ話が『竹取物語』の作者の構想に役立つたことは事實であらう。然し繰り返して云ふが佛典の我國に入る前から植物の中より子供が出生すると云ふ筋は既に我民族の間にフォーケローアとして存在してゐたに相違なく、かういう素材があつて作者の外國仕込みの構想も自由にはたらき得たのである。

一體此種の話が印度にも擴つてをることは事實であり、説話學者の中には世界の説話を印度より發源した、印度は説話の寶庫であると説く者がある。然し印度自身に於てもシナ同様その文化は多くの要素から形成されて複雑である事を認めねばならぬ。例へば印度の古代宗教に三様の異なる型あり、之を何れも異なる三人種層に應じてをるとは佛のプシルスキ教授の『印度に於けるトーテミズムとヴェジエタリズム』と云ふ論文中に説く所である (J. Przylusik, Tottémisme et Végétalisme, Revue de l'Histoire des Religions, Tome XCVI, No. 6, 1927)。此は图々。

印度の支配階級を形成するアーリヤ族は牛その他の動物を犠牲にして神に調理して捧げ、蘇摩と云ふ酒で灌奠するのが祭儀様式である。所が彼等の侵入以前印度を領せる種族に比較的色白きムンダ(コル)族と色黒きドラヴィダ類族と

があり、當初に於て相互懸絶せるものであつたが今日では混淆の結果相類似し、其宗教は多くの共通性を示すに至つてゐる。此等の先住民はアーリヤ族と異り、好んで人身供犠を行ひ、またその犠牲を生食とし、蘇摩の代りに他の飲料または犠牲の血を用ゐた。此形式の宗教はムンダ族固有のものであり、ドラヴィダ族にも影響せるものである。ドラヴィダ族は混血せる種族であり、その宗教系統は極めて複雑化してゐる。其祭式の中からアーリヤ式とムンダ（コル）式の二様式、禽獸を犠牲にして肉を調理し蘇摩で灌奠する型と、人身供犠をなし、犠牲の肉を生のまゝ捧げる型とを除くと、あとに梵語でブージャと呼ぶ祭式——偶像に水を灌ぎ、油を塗り、花を飾り、燈明を燃したりする様式が殘る。之は今日も殘つてゐるが本來聖樹や聖石の崇拜より起り、恐らくは樹木に水を灌ぐ習慣に原因し、かくの如き行爲により崇拜の對象物の生長を保證せんとしたものであらう。此形式の祭は最も原始的な神にふさはしきものである。此三つの祭式はたゞに印度のみならず、他の地方に於ても認め得る。ヴェダに表はれたアーリヤ人の宗教は多少の違ひこそあれ他の印度歐羅巴人種の間に於けるものと共通である。また生肉を食ひ、生血を啜る儀式は所謂トーテミズム——各氏族が或特定の動物の名を名乗り、之と特殊關係ありと信ずる信仰と密接な關係がある。ブージャの祭式はマライ半島の山地に居るセマン族の持つ宗教と對應してをると云へる。この色黒き矮人族は人間の靈魂は木に宿つてをると信じてをり、木からいろいろの方法で生兒に傳はると考へてをる。懷妊せる婦人は自分の生れた源由になつたと考へられる樹木と同種類で一番近くにある木の本に詣り、芳ばしき葉や花を懸け、また之を木の下に供へて、子供の魂が其木に氣附くやうに勉める。そして其魂を運ぶ鳥が其木に棲むのを見ると早速之を捕へ殺して食ふ。かうすると新しい子供の魂が母の胎内に宿ると考へられてゐる。魚は草、鳥は果實、動物もそれぞれの植物を食することにより魂が胎内に入ると信ぜられて

をる。古代印度にもかゝる信念が擴つてゐたことは例へばムンダの間に行はれてゐる民間說話に王妃が果實を食つて妊娠する云ふ筋の存在することによつて證擴だてられ、またジャーラカの様な佛教文學の中にも鳥によつてもたらされた果實を王妃が子種として求める筋が存してゐる。かういふ考へ方は人間の動物的性質を認めるトーテミズムと異り、人間の魂の植物起源を認めるものである。トーテミズムに於ては氏族が動物の種類に相應し、副次的に植物や自然力に相應すると云ふ特別な考へ方をもつてゐる。植物繁茂力の旺盛な熱帶地方で地に落ちた果實より樹の發芽するのを目撃した人類は、かういふ植物の繁殖から類推して一切の生物の發生を解釋する信念に到達したものであらう。地に埋められたマンゴの實からマンゴの木が生ずる生物も果實を食することにより、その胚種を吸收し、子の母となると信ぜられたのであらう。従つて植物ことに樹木を崇拜の對象とし之をあがめる爲水を灌いだり、花環を懸けたりする。かうして所謂ページャの儀式が發達したのであらう。かういふ考へからトーテミズムに移り變つたのは、或種の動物が卵より發生する狀、恰も種子より植物の發生するに似たるより自然、女子が卵子を呑んで妊娠する云ふ信念が生じ、卵生動物たる魚、龜、蛇、鳥の類を祖先と考へるトーテミズム的考へを惹起したと考へられる。即ち植物を起源とするヴェジエダリズムからかうしてトーテミズムに轉化し得たのである。前者が森林の繁茂する熱帶地方に行はれたに反し、トーテミズムの方はオーストラリアの様に地味不毛、従つて動物が主として食物として用ひられた地方に榮えたものであらう。即ち二宗教の差違は地理的環境の差異がもととなつてゐる。食物の豊富な熱帶地方が不毛な砂漠地方より最初に宗教の發源地となつたと考へられ、従つて或地方に於てヴェジエタリズムの方がトーテミズムより先に發生したと考へ得る。またヴェジエタリズムの行はれた地帶に於ては女は植物的產物の採集から漸次農耕に徒事する様になり、また藥用植物の

判別などから巫醫の職能さへ領する様になり、その權力は著しく増大したものであらう。云々。

以上のブシルスキ一氏の學說は古代印度の宗教研究に多くの示唆を與へ、その複雜性を明かにする點に於て甚だ注目に價する。南アジアが特殊な地形と人種とを有し、その宗教史を研究するに尋常一樣の手段により難く、ブ氏がトーテミズムの外にヴェジエタリズムなる新解釋を適用せんとする創見には自分も賛同する。然しへ氏の此意見にはなほ多少の批判を容れる餘地がある様である（拙著『古代文化論』五〇一五三頁）たとへばオーストロアジア族の宗教を頭からトーテミズムとされてゐるが、そのトーテミズムの性質に就て今一層精密な分析が必要ではなからうか。氏がムンダ族の民間説話を例證にひかれたが、オーストロアジア族の固有宗教はトーテミズムにしろ動物のみならず植物と關係深き形式のものであつたのではないかと思ふ。東南アジアの如き植物の繁茂し、原始農耕の發達したと考へられる地域に於て植物を各氏族と密接な關係あるものと認めるトーテミズムの特殊形態の生れることは當然考へられることではなからうか。マライ半島のセマン族の靈魂觀は彼等の宗教が著しく他種族、殊にモン・クメルなどの影響を受けて進歩せるものである事を考へに入ると、果して何處まで原始的なものなるか餘程慎重に考ふべきである。要するにブ氏の提言する假説の證明せられん爲にはなほ將來の詳細な検討が必要とするべきである。ブ氏はトーテミズムに於て動物との關係のみを重く見てゐるが、他面植物との關係を閑却してはならぬ。自分は曾つて『チャムの椰子の實説話』（拙著『印度支那の民族と文化』三四三一三五二頁歴）といふ小論中にインドシナに於けるチャンパ族が椰子と檳榔樹との兩氏族の對立した社會を構成し、前者は椰子の實より、後者は檳榔樹の苞より子供の生誕した傳説を保有し、植物トーテミズムの痕跡を多分に有することを指摘した。その際またニーギニアのマリンドアニム族がゲブゼとサミ・レクとの二大部族の對立より成

る社會を構成し、之がもと椰子と沙穀椰子との二大氏族より發達したものであることを擧げ、チャンパの社會機構との親似を述べた。其際少し大膽であるが佛印の新石器時代初期の住民がパプア・メラネシア系の人種であると云ふ考古學者の説を引き、パプア人の宗教に似たものが曾つてインドシナにも擴つてゐたのではないかと推定したことがある。もしインドシナ東部の舊住民チャンパ族も之に似た信仰を持つてゐたとすると古代インドシナの宗教として植物トーテミズムの存在を假定することは必ずしも無理な想定ではあるまい。

新石器時代初期から同じく佛印にも擴つてゐたと考へられてゐるネグリトー族の宗教はセマンをもつて例とすれば上述せる如く植物に生物の靈魂の源由を求める信仰である。然しながら忘れてならぬことはセマン族も同時に其魂を仲介する靈魂鳥の存在を信じてることである。P氏の意見では鳥の介在は後からでありと云ひ、西部のセマン族は果實を食し、人の母となると云ふ信仰を持つてをり、之が原初形態であると云はれるのであるが、自分の見た範圍ではさういふ記事は見當ぬやうである。ネグリトーの考へ方が靈魂の植物源由説であり、此點はパプア族のある者とも共通な點あることは認め得るも然しネグリトーの信仰をヴェジエタリズムと云ふ、トーテミズムとは別種の原始宗教形態と認めるには尙今後の綿密な再検討を必要としなければならぬ。たゞネグリトーの信仰形態がP氏をして印度に於けるブージヤと呼ばれる祭式の起源を説明するに役立つた様に同時に之がインドシナ及び之に隣接する地帶の文化の解明にも役立つことは認むべきである。

此處にインドシナ半島の原住民であり、曾つては支那の南部より印度中部にかけ、勢力を振つてゐたと考へられるオーストロアジア語族を初めとして東南アジア住民に於けるトーテミズム始信仰の存否、その痕跡と思はれる傳説、神話等に就て各個別に記述して見よう。

先づ印度中部山地帶に住み、ショミット師によりオーストロアジア語族と銘うたれてをり、最近他の學者の論駁により相當問題はあるも、同語族の影響を多分に受け、之と密接な關聯のあることは否み得ないムンダ族一名コル族から述べてみる。此種族は、ムンダリ、サンタル、ブミジ、ホ、ビルホル、コダ、トゥリ、アスリ、コルワ、クルク、カリア、ジュアン、ザヴァラ、ガダバなどと分れてをるが、その中サンタル族に就て先づ述べて見よう。其神話によると、種族の起源は二つの卵子を生んだ野生の鶴鳥に歸せられる。その卵子から種族の祖ピルチュ・ハラムとピルチュ・ブルヒの二人が生れ、相結婚して最初の七氏族を生んだ。最初の住地はヒヒリ一にアヒリ・ピプリと云ふ所であり、それからコジ・カマンと云ふ所に移つたが、其處で全てのものは邪惡のため火の雨を降らされて滅び、唯一對の夫婦だけがハラと云ふ山の割れ目の中に入つて命が助かつた。それから所々轉移し、ジャブリと云ふ所に於てマラン・ブルと云ふ大山を越ゆることが出來ず、山神に祈り、其加護により、アヒリと云ふ國に達する峠を發見する。其處からまた所々に移り、現在の所に到達したのだと云ふ。傳説によると彼等は初の平原に於て定住生活をなし、制度も稍々完備してゐたのに、印度人に追はれ、山林の中に逃れたのであると云ふ。現在は原始的な耕作方法で稻を栽培し、簡単な手工業、例へば山羊皮の鞴で鐵を造る程度の技術を知つてをる。その人種型に就てリズレイは之をドラヴィダ型と見做してをるが、サンタルの間に永く居住したボディングは、彼等の間にネグリトー的な基盤あり、その外に蒙古型の特色あり、或者は

インドシナ人と殆ど異らざる程であり、更に近代にアーリヤ型の混血あり、極めて雑多な混合種族であることを認めてをる。

サンタルの十二の異族結婚の氏族は、一、野生の鶲鳥、二、一種の羚羊、三、キスク、四、檳榔樹、五、草、六、昂宿、七、テウデウ、八、バスク、九、鷹、十、鳩、十一、蜥蜴、十二、羊？ からなり、此中最初の七氏族は、始祖の子より始まつたとされてをる。各氏族は十、十一、十二を除き特有な合言葉を有し、之が部族の初期の住地に於ける地名であつたらしい。此合言葉がアメリカ印度人やオーストラリア人に於けるトーテム標章に相當するものらしく、之によつてその氏族々員の同族紐帶を憶ひ起さしめるのであり、同時に其氏族が古くから地域的のものであつたことを示しをる。自己の氏族外の氏族とは母の氏族をも包含して結婚して差支へないが、たゞ母の屬する副氏族のものとは結婚を許さぬ。鳩と蜥蜴の氏族は部族の催した有名な狩に同名の動物しかそれなかつたからかく命名されたとされ、また羚羊の氏族はその動物を殺すこと、その肉に觸れることさへ禁ぜられてをる。また副氏族も各特有な習俗を持つてをる。一月の收穫祭の際シデウプと云ふ副氏族は家畜小屋の入口の端に稻の藁の一束を樹てる。之を自ら解いてはならず、必ず他の副氏族に屬するものに取り除いてもらはねばならぬ。またサークーと云ふ副氏族のものは結婚式に際し朱を使つてならず、また赤く縁取つた衣服を著してはならぬ。オクと云ふ副氏族は、家の中で山羊や豚を犠牲にし、式の間戸を固く締め、煙の逃げぬ様にする。此オクと云ふ語は煙を以つて燻すと云ふ意味がある。ジフと云ふ副氏族はジフ即ち鶲を殺し、又は食することが禁ぜられてをる。また此鳥の卵に似てるので、ジフ・マラと呼ばれた一種の頸飾を纏ふことを許されぬ。此鳥は氏族の祖先が森の中で渴して死なんとしたとき水のある所に案内したと云はれてをる。その外にサン

タル族は、最高神を日神と同一視して祭り、また山神、火神、森神等を信仰してゐる。(Risley, *The People of India*, 1915, p. 441. Frazer, *Totemism and Exogamy*, vol. II, p. 30. Bodding, *Les Santals*, J. A., No. 1 juillet-septembre 1932. " ノット『歴史

以前の印度』⁽⁴⁾ 昭和十八年、邦譯 1 九三、一九四頁)

またムンダリに就て述べると其氏族は三百三十九以上にのぼり、その大部分はトーテム的で動物又は植物から命名され其氏族々員は之を食することが禁ぜられてゐる。トーテム動物としては虎、豹、象、狼、豺、鷙、一種の蛇、河蛇、コブラ、大鹿、鹿、野牛、馬、猿、豚、犬、山犬、猫、鼠、廿日鼠、木鼠、豪猪、兔、栗鼠、龜、鷹、鳶、禿鷲、鶲、鸚鵡、鵝、鳥、Kingcrow, 雄鶲、牝鶲、その他の鳥、黒蜂、蠅、赤木蟻、白木蟻、赤羽蟻、穀象虫、地虫、赤虫、蛙、鰐、水蛇、その他の魚、トーテム植物としては米、煎米、稻、ヤム、バナナ、馬鈴薯、甘藷、カレー用植物、檳榔、蓮、種々の果實、無花果の根、*Ficus Indica*, タマランド、クスム樹、マハガ、一種の草、茸、苔が擧げられる。また雜トーテムとして鹽、赤土、灰、一種の泥、朱、銅、繭、角、骨、透明バター、蜜、新米の粥、満月、月光、虹、六月、水曜日、眞鍮腕輪、洋傘等が見出だされる。そして牛肉を食してはならぬとか、金を使用してはならぬとか、劍に觸れてはらぬと云ふ類の禁忌が氏族毎に課せられてゐる。稻をトーテムとする氏族の各員は米及びその粥を食ふことが禁ぜられてゐるし、ウドバーン樹を名とした氏族の各員は其木から抽出した油を使用してはならぬ。(Frazer, *ibid.* vol. II, p. 292)

中央印度を去つてアッサムに來ると此處にオーストロアジア語族に屬するカシ族が住んでゐる。此種族に關する知識の供給者たるグルdon氏は彼等が背あまり高からず、骨格たくましく其風貌日本人に酷似すると云つてゐる。有肩石斧に類似する鍬を利用して稻、薏苡、玉蜀黍、馬鈴薯、粟等を耕作してゐる。彼等は異族結婚の單位たる氏族に分れ、各

女性の族祖を崇拜し、その下に曾祖母を祖とする副氏族あり、更にその下に祖母を頭とする家族が存在する。氏族は共同の墓地を有し、祖先の記念として巨石遺跡、メンヒル、ドルメン類似のものを建設する風習あり、此點ムンダ族と共通である。男子は自らの取得した財を除いては所有を許されず、酋長の承繼も女系で長女の子供に傳はる。氏族の名の或者は動物名である。例くば Shriei ムカムカは猿の氏族であり、Tham ムカムカは蟹の氏族であり、Diengdoh とムカムカは同名の樹木の氏族である。その場合其氏族は此等のものと緣故があると考ぐられてゐる。例くば Diengdoh 氏族の女祖は此木から造つた大きし槽で澤山の豚群を飼つたからかく命名されたと云はれてゐる。また檉の美しい森林のある國土なので檉の木の氏族も數えられる。此等の氏族は最早同名の動植物に對する禁物をし有してゐなじが、然し或氏族はなほ幾分その痕跡いしるものを保有してゐる。即ち Nongtathiang 氏族はレモノを食ひや、Khar-umniud 氏族は豚を禁忌してゐる。チヨラの田家は乾魚を食ひや、ムイリムカの田家は南瓜をタブーす。その他、カシの個人及び家族で各種食物に對する禁物あり、其家にゐる歸るんじが頭おねじをゐるのムーラムズムの痕跡ではないかと考へらる（Gurdon, Note on the Khasis, Snytengs, and allied Tribes, inhabiting the Khasi and Jaintia Hills District in Assam, Journal of the Asiatic Society of Bengal, LXXIII, part III, No. 4—1904, pp. 57—74. Frazer, ibid., vol. II. pp. 812, 322）。カシは卵子から祖先の發源する說話を傳へる様であるが此種族では卵子を呪物として尊重し、卵子を割るなどにより吉凶を卜ふ習俗を保有してゐる。例くば葬式の時まづ湯で身體を洗ひ、鷄卵を臍の所に安置する。また焼いて骨を納骨場に安置してから、其死因を知るため卵を三度割つてトゞ。その外、家を建てる時、旅行に出發する時も同様である。また彼等の間にトゥンと叫ぶ一種の蛇憑きの信仰が存し、此蛇神に憑かれた家は金持ちはなるが、時々人間を犠牲

にして之を祀らねばならぬとされてゐる。(Gurdon, ibid., 57—74)

アッサムからビルマに入ると此處のオーストロアジア族であるパラウン族は、矢張り米食種族であり、文化も相當進歩し、佛教を信じてゐる。その神話にも印度の影響が認められるがそれと共に固有の色彩も濃厚である。

大昔イ・ラン・ティと云ふナガの王女が、太陽と人界とが見たり、地下深奥の國から人體を借りて出で來り、マオ河の近傍の園の間を遊歩する。日の御子が之を見そなはして其車を地に轉じ、人體を借りて之に求婚し、七日之間共に住み、飽きると天上に歸つてしまふ。イ・ラン・ティは妊娠してナガなるが故に三個の卵を生み、之を孵化せんとする。一方日の御子は離縁狀を書き、之に魔法の寶石を包み、小袋に入れ、金毛の鳥の頸に結び、ナガ女の許に遣る。鳥はマオ河に達した際饑ゑ疲れ、他の鳥共が鬼の宴會の残り物に舌鼓打つてゐるのが羨しくなり、小袋を河の汀なる木の枝に結び、仲間入して殘肉食ひに夢中となる。其時小舟に乗つた漁夫が河を下つて來て此小袋を認め、木に上つて之を開くと美しい寶石があつたので之をとつてしまひ、代りに小石を入れて小袋をもとの木にかけて置く。鳥は食事が終ると袋をまた頸にかけ、ナガの許に飛んでゆき、使命を果す。ナガは日の御子から使が來たと云ふので悦んで手紙を読み、案に相違した文句と且つ魔法の寶石と云ふのがたゞの小石なので大變激昂し、小石を鳥に投げつけて追ひ返す。鳥は天上に舞ひ戻つたがその状を聞いた日の御子は鳥の命令違背を知り、大變怒つて鳥の身體を黒く塗り、下界にいつて止まれと命ずる。かくて日の御子とナガとは仲違ひとなり、幾日も日は光を與へず、世界は暗黒となつた。ナガは悲しみ、且つ怒り、卵をとつて之を放り出す。且つ頭に挿してゐる金色のピンをとつて投げる。そしてまたナガの姿となり、地下の國に歸つてしまふ。ピンはワの國に落ち、山に突き刺つて粉となり、ワの住民は今

も、川の砂の中にその金屑を拾つて精鍊する。卵の一は玉の山にぶつかり、觸れた岩を皆玉に變じてしまふ。第二の卵はモゴクの地方に落ち、岩に衝突し、其岩はルビー其他の寶石で充滿する。第三の卵はマオの河中に落ち、浮木の又の間に挟まつた。浮木は河を流れ下り砂岸に漂著する。その傍に子供の無い老夫婦の作れる園があり、夫婦は岸に薪を探しに來り、此卵を發見する。そして之を家に持ち歸り、大目にしてをると七日にして之が割れて中から子供が生れた。夫婦は此子をコクヤと名づける。其子は大きくなると容貌美しく十五歳の時、日の御子は之に魔法の弓を與へる。其母は地下界でナガ王と結婚したが地上に生み遣した卵のことが氣にかかり、ナガ王との間に儲けた王女が十三歳となると之を人界にやつて事情をみさせる。ナン・シウェ・ケと呼ばれるナガの王女は若き娘の姿を借り、河岸を遊歩する。コクヤは其時木の下に眠つてゐたが、日の御子が之に美しい娘の姿を夢みさせる。次の日彼は河岸を散歩し、夢に見た娘に遭ひ、之と結婚し、之によつて一人の娘が誕生する。其時巨鳥が出現し、人々を殺し、之を食ふ。コクヤは之を射殺したので八家の人々は之を恩とし、その周圍に集り住み、其保護を受けることとなる。或日ナガの王女は人に化してから十四（或は七）年七箇七日經ぬ中は水に入るなど云ふ母の禁戒を忘れ、水中に浴し、ナガの姿に立還る。コクヤと娘とは母の戻らざるを心配し、水邊に來て頭と腕の外、ナガの姿に化した母を發見する。蛇體の母は娘に自分を忘れず、ナガの皮の様な金、銀、赤、黃の縞目ある上衣を著用する事を命じ、水中に隠れてしまふ。娘は岸に残された母の上衣を持つて家に歸る。そして他の八家の人々も其上衣を眞似し、爾來女は皆美しい色彩ある衣服を著すこととなる。そして人々はモン・マオの傍にすみ、コクヤは其王となる。ペラウン族の君主は全て此ナガ王女の子供から發祥する。——(L. Mihne, *The Home of an Eastern Clan*, Oxford, 1924, pp. 379—383)

ビルマの東北部の山中にワと云ふ比較的原始状態を保有する種族が居住し矢張りオーストロアジア語族に屬してゐる。彼等はパラウンより背高く、色も黒く、鼻は平たいが蒙古型で髪の毛は縮れてゐない。ワは生と熟とに分れ、前者は耕作の際、精靈に捧げるため首狩を行ふ風あり、後者は佛教信者である。彼等の神話によると、

大昔ヤトウムとヤタイと云ふ未だ何等の煩惱も知らぬ男女二人があた。天の神が此二人に二箇の瓠を下し與へた。二人は之を食べ、其種子を蒔くと、三月と七日にして發芽し、三年と七月にして大きな瓠が實り、小山の如き大きさとなつた。其中に一人は欲情を覺える様になり、ヤタイは妊娠して虎の耳と脚とを持つ女兒を生んだ。兩親は年老い、誰でも瓠を割り得る者に娘を與へんと云ふ。その時天から降つて來て、古き土灰を食したため身體が重くなり、天に歸れなくなつたクンサンレンと云ふものあり、娘を見て之を妻に迎へたくなり、天神に請うて神劍を授り、それをもつて瓠を割ると一つから全ての動物が、他から人類が出て來た。クンサンレンに三子が生れ、サルウェン河の源なるノーンタリップに行き、其處の王女と何れも結婚する。末子のマンレンに生れた息子マンチャウサはワの王女と結婚したが、後にナガの王女と婚し、そのナガの王女はチーク樹の森の中に卵を生む。其卵を虎が孵し、中から生れた子がそのチーク林に因み、クンサクと名づけられ、後には一に「虎王」と呼ばれ、ウインマイの都を建設した。云々

以上の話は大分後世の影響を受けてゐるが次の話は一層固有的な色彩を保有してゐる。

ヤトウムとヤタイとは初めおたまじやくしとして山の湖水の中に住んでゐた。その中、蛙となり、しまひに鬼となり、穴の中に棲息してゐた。そして四方に出ては獸をとつて食してゐたが或時人界に出で、一人の人間を捕へ食ひ、

其頭蓋骨を持ち歸つた。それ以來子供が生れる様になり、何れも人間の姿をなしてゐた。兩親は人間の頭蓋骨を棒の先につけて祀つたが、爾來子孫繁殖してワの部落を形成し、首狩の習俗を固守する様になつた。(Scott, Indochinese, The Mythology of All Races, pp. 293—394)

ビルマの平原に於て印度文化を受け、盛大な發展を遂げたモン族もオーストロアジア語族であり、卵生傳説の持主である。印度的な傳承であるが次に之を略述して見ると、

マルタバン山脈中のシンジャイと云ふ山に一隠者が住んでゐた。この山に一人のナガ女が果實や花を集めに登つてくるのを常とした。其處でヒマラヤの山からさまで來た一人の精と遇ひ、ナガ女は懷妊して蛇の様に卵を生んだ。隠者がその卵を見つけ、之を持ち歸ると中から美しい小女が生れた。之を育ててゐる中、彼女が十六歳になるとタトンの王が之を見だし、妃に迎くる。かくて一人の子を擧げたが、然し此二人の王子が龍族の出であることがわかつたので貴族達が之を除かんとした。王は其處で一人を隠者のもとに送る。隠者は此一人を西方に向はじめ、海中に示現した金色の鷲鳥の島を求めしめる。此島に辿りついた一人は從者と共にインドラの加護を得てペグーの都を建設する。

(Forbess, Languages of Farther India, 1881, pp. 35—38)

東都インドシナ安南山脈中に住むモイ族の中チャム族に近いジャライ族の間には其氏族制度にトーテミズム的痕跡が見られる。彼等の氏族は動物又は植物を名としてゐるが、また屢々他の雜物をもつて命名されてゐる。セオ(兵隊蟻)、ルマ(犀)、オ(とげのある竹)、ジユラン(道)、クバ(眞直ぐ)、ルツォム(乾)、クソル(棄てられた開墾地)等の氏族あり。其各々は食物の禁忌を有してゐるが名前とは關係ない。セオ(兵隊蟻)の氏族の者は墓を食つてはならず。食

もと死つるが出来る。クバとルマの氏族は大蜥蜴を食じてはならぬ。之を犯すと皮膚が乾いて白いかさぶたの様になり、剥落すると信ぜられてゐる。ルツォムの氏族は牛肉を食ふことが禁ぜられ、之に違犯すると咳が出、血を吐いて死ぬと考へられてゐる。(H. Maspero, Moeurs et Coutumes des Populations sauvages, Un Empire Colonial Français, L'Indochine, Tome 1, p. 253)

モイ族の中でベナル族はカシ人同様卵割りの風俗を持つてゐる。例へば物が失くなつた場合、死んだり病んだりする原因が不明の場合、巫郎ちベイジヤウがさういふ不祥を惹起した發頭人と思はれる人の名を呼びながら卵を握つて押し潰さうとする。若しそれが眞犯人であつた場合は破れず、犯人であつた場合は破碎すると考へられてゐるのである(拙著『印度支那の民族と文化』二五頁)。中流下流々域に榮えたクメル人も神判として金環鷄卵を沸湯中に投じて之を探り取らしめる探湯の法を有してゐたが之も恐らく卵子によるト占と關係のある風習であらう(同二一頁)。またベナルの支族たるルンガオ族は、夢で精靈と盟約を結び、互ひに助けあふ義務を持つ、即ち精靈が動物であり、植物であつた場合には、その危難を助けねばならず、之を食する事は禁ぜられてゐる。此の盟約は其家族にだけ及び氏族には擴大せられない。かういう習俗が眞正のトーテミズムではない事は申すまでもないが、新大陸の個人トーテミズムなどと或程度相似たものと考へられる。(前引書、二五、二六頁)

中部インドシナの海岸に居住し、曾つて華かな文化の持主であつたチャンパ人も同様椰子と檳榔樹の氏族を有し、かの椰子の實より子供の生れた説話や檳榔樹より王子誕生した傳説を傳へてゐた。之に就ては前に述べたことがあるので詳述を省く。(拙稿『チャムの椰子族と椰子の實説話』『印度支那の民族と文化』三三七頁—三五三頁)

東部インンドシナに於ける最も人口多く勢力強大な安南民族はオーストロアジア語とタイ語との混合型と呼ばれる言語を使用してゐるが、彼等も卵生傳説の持主である。『大越史記』全書によると初め炎帝神農氏三世の孫帝明が帝宜を生んだ。後南巡して五嶺に至り、婺僊の女と接し、涇陽王を生む。王は聖智聰明なので帝明之を奇として位を嗣がしめんとした。然るに王固く其兄に譲り、敢て命を奉じない。そこで帝明は、帝宜を立てて嗣となし、北方を治めしめ、王を封じて涇陽王となし、南方を治め、赤鬼國と號せしめた。王洞庭君の女、神龍を娶つて貉龍君を生んだ。此君が帝來の女、嫗姫と云うのを娶り、百男を生む、之が百粵の祖となつた（百男は俗に百卵と傳へてゐる）。一日貉龍君、姫に謂うて曰く、我是龍種、爾是僊種、水火相尅、合併實に困難である。乃ち之と相別れ、五十子を分ちて母に従ひ、山に歸しめ、他の五十子は父に従ひ南に居る。其長を封じて雄王となし君主を嗣がしむ云々とある。安南語で卵のことをナンと云ふ。史記に「百男は俗に百卵と傳へてゐる」と云ふのは、作者が此話を採録した場合これを合理的に訂正したので、俗傳と云ふのが寧ろ古傳であらう。此傳説の原型に近いと思はれる嶺南摭拾列傳卷一、鴻厖氏傳には嫗姫が一胞を生み、之を原野に棄てると七日にして開いて百卵を出だし、一卵一男を生む、歸つて之を養ふと乳哺を勞せずして各々長大となつたとある。（山本達郎氏「印度支那の建國説話」『東亞交渉史論』上二六六—二六七頁）

即ち貉龍君と云はれた王者が僊種たる女との婚姻の結果百卵を生み、しかも兩者離反し、一方は海、一方は山に歸する云ふ結果になつたのである。貉龍君の貉と云ふのは安南の古名甌貉の貉から來てるのでその甌が嫗姫の嫗となつたのであらう。そして此君は龍君と呼ばれたのであり、一説によるとその治むる所は南海と云はれてゐる。また母が神龍と呼ばれてゐた所から貉龍君の屬性が女系から來てをることも考へられる。殊に生れた子が一つに分れ、母と父とに

歸するのも吳士連が注意した様に父の權力の強い社會と共に母が酋長として權力を占むる社會の併存が考へられる。此傳說に似てゐるのはアイヌの物語に見ゆる龜神の男の子と龜神の娘とが婚し、六十人の子を生み、その半數が魚介の住家へ行き、他の半數が山の方の鳥獸の住家に行き、全ての生類が之から出たと云ふ話である（金田一京助氏『アイヌラツクルの傳說』百六頁）。これはトーテムを異にし對立してゐた二集團の間に結婚の行はれた社會の痕跡を語るものではなからうか。最初同棲してゐたものがその性に従ひ、つひに分れ去ると云ふのはさういう社會の結婚が惹起する紛爭の印象を語るもので我國の豊玉姫傳說、キュビットとサイキの傳說なども其類話と解されてゐる。安南傳說はシナ影響を多分に受け、かつその成立はあまり古いものとは考へられぬが說話としての型は民間に行はれてゐた古い傳承をとりいれたものと見られよう。

東南アジアの古代住民たるオーストロアジア系統の種族はかようにそのごく原始的な文化を保有するものの間にトーテミズム的な痕跡あり、しかも其中に植物的トーテム要素が多分に存在することが認められる。且つその文化進歩せるものの中にも卵生傳說が共通であり、シナ及び印度文化の影響濃くその傳說が固有體を失つてすることを否み得ないがその本質に於て依然外國種では無いのである。

五

更にオーストロアジア族の南にあり、海洋上に散布しをるオーストロネシア族の間にも同じことが認められる。インドネシアの開闢說話を研究したミュンステルベルガーはオーストロネシアの原初的神話型として土を萬物の母であり、

根元と見る見方と、樹木又は卵子を母性的始元と見る見方と二つの型を挙げ、之がスマトラのバタク、ボルネオのケンヤ、クルマンタン、バハウ、デウスン、マルト、イベン、オロ・ガジニ、オトダヌムの間に見られると述べてゐる。オーストロネシア族はインドシナ半島より南海々上に進出したものであり、大陸上に於てはオーストロアジア族の文化と相類似せるものをしてゐたと考へられるが兩者の抱いてゐた原始信仰には相共通せるものがあつたと考へられる。

オーストロアジア族のみならず、彼等の基地に北より侵入して來た他の諸族の間にも同様な原始信仰が窺はれる。まづチベット・ビルマ語族に就て述べて見ると、リズレイはその『印度の民族』(一〇三頁)の中にアッサムのチベット・ビルマ系語族に就て次の如く述べてゐる。

「アッサムではガロは猿、馬、熊、鼠、蜥蜴、蛙、鳥、南瓜、その他多くの木をトーテムとして數へる。カチャリは、木蝸牛、ムガと云ふ昆虫、セサマムと云ふ植物、クムルと云ふ大瓢箪、及び虎をトーテムとしてゐる。虎の氏族のものは虎が殺された場合、贖罪としてその陶製の器具を投げ棄てねばならぬ。……クキは犬を、ラルンは卵、魚、南瓜をトーテムとする。ミキルのトーテムは主に植物であるらしい。然し自分のアッサムに於けるトーテミズムに關する知識はごく乏しく問題は一層の調査を必要とする。云々」

フレーザーは前引書(三二四頁)の中にラルンに就て次の如く述べてゐる。ラルンは多くの異族結婚の氏族に分れ、その中に竹、小山の頂、鹽などの名が數へられ、その理由として恐らく推測と考へられるが、其建設者が小山の上で生れたとか、鹽の箱の中に生れたと云ふ話が物語られてゐる。たゞ一つの疑ふべからざる例は白南瓜の氏族でその族員はその名の原因たる南瓜を食すること、栽培すること、觸ることさへ禁ぜられてゐる。今一つの氏族は、マリといふ魚

の名をとり、他の氏族はマヘデオ(大神)を怒らしめて、ラルンに變ぜられた一人の娘から下つて來たと云はれてゐる。

マニアールのメイティ Meitheis は七の異族結婚の氏族に分れてをり、各氏族は銘々禁區されたもの即ちトーテムを持つてをり、もしそれに觸ると不思議な死方に遭遇したり、わけのわからぬ病氣にかゝつて死んでしまふ。ニンタジヤ氏族のトーテムは蘆であり、モイランのそれは水牛であり、クマルのそれは魚である。各氏族は同名の祖先を崇拜してをるが時に例外あり、ニンタジヤの氏族はパカンベ、1に「東の王」と呼ばれるものを崇拜し、此祖先は時々蛇の姿で示現すると考へられてをる云々(フレーダー、前引書三二(七頁))。即位式の際君侯は祖先の神蛇の棲む岩間に座を占め、その蛇の熱い息吹きに長く堪へられれば堪へられる程治世は長く幸福だと信ぜられてをる。(Eduard Erkes, *Der Totemismus bei den Chinesen und ihren Stammverwandten*, "In Memoriam Karl Weule," Leipzig, 1929, S. 104)

その外カチンは南瓜から發祥した人物から全種族が生れたと傳へてゐる。また南方チン人はその種族の淵源たる卵子を孵したキングクラウを殺したり、食したりすることを禁じてゐる(フレーダー前引書一〇四頁)。またタドにも卵生傳説が始祖に就て物語られ、ナガは豕から出たと物語られてをることである。(エルケス前引書百四頁)

イラワディ平原に於ける文明民族ビルマ人も卵生傳説の把持者であり、その1例として印度的ではあるがプロムの由來談を左に錄しよう。

宇宙を焼き盡す紅蓮の焰が消えると河の岸にバニヤンの木が生え、その枝に1羽の鳥が巣を造り、五つの大卵を生んだ。バニヤンの木が暴風で倒れ、卵は地上に散亂した。一個は牝牛にみつかり、今一個は蛇に、其他は、鶴、國王、乞食に各々拾はれて孵された。卵から生れた兄弟達はまた會合し、その搖籃の地たるバニヤンの木を想起し、一緒に

育ての親を探しにゆく。そして彼等の墳墓をみつけ、目印として鶏に育てられた子は杖を、蛇の子は水漬しを、乞食の子は其衣服を、國王の子は眉の毛を埋めた、此地點に後にシ・ウ・ウ・エ・ダ・ゴン・パ・ゴダが建設されたのである。(Bastian,

Die Geschichte der Indochinesen, 1866, S. 14)

雲南の南に居住するツヒ・マオのロロ族の間にもトーテミズム的習俗の痕跡が報告せられてゐる。即ちエー・ヘンリイの記述によれば、此部族は或樹木又は動物、時には樹木及び動物の名を字としており、之をもつて家族の祖先の名としてをる。此名は非常に古代に遡る場合あり、例へばブルーベーと云ふ字はシトロンを指す古代語で今日ではシトロンはサルの名で知られてをる。人の字を聞く普通の方法は「貴方の觸らないものは何ですか」と聞くことである。かう聞かれると上述の人間だと「私共はシトロンに觸れぬ」と答へる。字としてをる植物なり動物なり或はまた兩方ともが食することも觸ることも禁ぜられてをる。然しどちらも信仰の對象となつてをらぬ。同じ字のものは相互に縁戚でなければ結婚して差支へないが、然しほ、三の字の集團で相互に結婚が禁ぜられてをる場合がある。但しラウフェル、フレーザー共にロロ族のトーテミズムを論ずるにヘンリイの報告だけ引用してをるが、アルフレッド・リエタルの一九一三年に出版した Le Lolo Po au Yun-Nan によるヘンリイの研究はロロの一部族にたまたま存せし報告であり、ロロ族全體には動物、植物を字に附する習俗が普遍的に行はれてをる譯ではないと云ふ。

チベット・ビルマ族と並びインンドシナ半島に北方より侵入したタイ・シャン語族の間にも同種の信仰が認められる。

アンリ・マスペロの研究によれば、東京地方に住する黒タイ種族の間に於ては家族の名と同名の物を禁忌する習慣を存してをる。ラウと云ふ家族は、筍(ノラウ)を食事中、飯の出る間

使用してはならぬ。トンと云ふ家族は、銅（トン）の小片を帽子に著けてはならぬ。そして此等のタブーを如何なる祓除によつても脱却する事が出来ない。又タイの或家族は、虎に對し支配力を持つてゐる。そして彼等はその肉を食ふことやと其狩をなすことを禁忌されてゐる。そして死虎を祖父と呼び、之を葬らねばならぬ。

東部シャン・ステートのケントゥンの洪水傳説は佛教的の影響があるが、しかもなほ瓠の挿話が介在してゐる。

昔ベナレスから一人の貧しい男が來て牛飼ひをしてゐた。大變善人であり、よく施したので山地の住民たるカ族は之を大きい籠の中は入れ、折柄死んだ王様の御殿に送りこんだ。習日長老や住民が集り、この牛飼ひを王に任命した。然しその政治に不満でカ族は王を再び籠に入れ、一孤島に流してしまつた。そこで死んだ王は蟹に生れかはつてまたケントゥンに來る。その時丁度大洪水で平野は水浸しどなづてゐた。たまたま四十九羅漢が遊化して來り、將來北から聖人が來て水を乾すだらうと豫言する。果して佛涅槃後百五十年にしてウォーン・ティファンと云ふ支配者が北に現はれ、その子の衆兄弟がケントゥンに來り、水路を鑿つてその水を引かさしめ、今日の沃野と化せしめる。その中瓠が實り、地に落ちて割れ、其種子が散亂してワと云ふ人種が發生した。ワは全てウォーン・ティファンに臣屬したが、その中或支族だけが首領がゐないから服従せぬと頑張る。其處で四匹の馬をひかせ御者のない車を飛ばさせる。馬車が或木の下に自然に止ると其木から一人の天より降つて來た男女がありて來て人々に土地の支配者として推載される。その子孫としてマライと云ふ者が出て、チエンマイの王女と結婚し、チエンライとチエンセンの建設者となり、またワを追ひ拂つてケントゥンの國をつくつた云々。(Scott, ibid, pp. 278—281)

ラオ人も全てのインドシナの人類は南瓜から發源したと云ふ傳説を持つてゐる。此南瓜はメークン河にルアンプラバ

ンの傍で流れこむナムウーと云ふ河の北東の高原ムアンテンに生じてゐたと云ふ。そしてその南瓜から出た子供は東はシナ海まで南はメークンとメナムまで西はビルマまで擴つたと云ふのである。(Scott, *ibid.*, 786)

タイ・ノイ族の傳説はラーンチャン史の中にあらはれてゐるが、其中にも洪水傳説が見える。即ち天の怒りに觸れて大洪水が起り、三人の王だけが樹を伐つて浮家を作り、天まで避難する。洪水がひいてから又天から降り、天王から與へられた水牛で田を耕しゆると水牛が死ぬ。其死體を捨てるにそれから瓢箪が芽生え、三つの米の納屋程ある大瓢箪が實る。其中に人の聲が聞えるので燒いた鐵をおしつけ、穴を開けると中からわがちに人間が出て來た。穴から出て來た人間は二族に分れたが、更にそれでは穴が小さ過ぎるので今一つ穴を開け、鑪をかけ、廣くすると中から人間がなだれ出て三族に分れたと云ふ。(アノマンランチャトン原著。江尻英太郎氏譯『タイ民族の話』草稿)

タイ・ヤイ族の話もタイ・ヤイ史によると六十人の人が瓢箪から生れたと記されてゐる。この六十人のものが米を常食にする者と、玉蜀黍を常食とする者と、肉を常食とする者と、樹の根を常食とする者の四族に分れたと云ふ。又ブータイ族史では、瓢箪から生れ出た人々が五姓に分れたとある。(アノマンラーチャトン、前引書)

アッサムのアホム族史は其族祖の天降傳説を傳へてゐるが其傳説中に神の一人の話として昔地上の人々が相争ひ、死する者が多かつた。其時天王は卵から三人の人間を孵化させ、それを送つて七洲を治めさせたが、其後數年にして三人は消えてしまつたと語つてゐる(前引書)。アホムの洪水傳説については次の長い物語が報告されてゐる。昔、大地は山だらけの藪林の如き状を呈してゐた。或時竹が割れて中から諸動物が出て來、人里離れた密林の奥に棲息した。やがて天からピポク Hpi-pok ピモト Hpi-mot と云ふ王と王妃とが降りて來てカンボジア河の岸なるメンヒに至つた。彼等は

シャンの王族の祖先である。然しその子孫が神神に祭祀を怠つたので暴風雨の神リンローン Ling-lawn が激昂し、大きい鶴を降して人類を啄ばみ食はしめたがそれでも人類は盡きなかつた。次には獅子を降したが之も人類を絶滅出来なかつた。次に大蛇を降して人類を呑み盡せんとしたが之も失敗した。其處でリンローンは水の神カンカク Hkang-hkak を遣はし、洪水で人類を滅さしめんとした。水の神カンカクは地上に現はれ、賢人リプロン Lip-long に大洪水の到來を豫告し、丈夫な筏を造ること、その上に牝牛を載せ一緒に危険を逃れること、但し他人には妻子にたりとも此事を洩らしてはならぬと教へた。そこで賢人は日々材木を集め筏を造り始めたが、人々は之をあざけり妻子をも之を笑ひものにした。果して豫言通り大洪水が來て全ての生物は死に絶えたがリプロンだけは筏の上に牝牛と共に漂蕩した。地上は溺れ死んだ人類の屍體で満ち満ちた。暴風雨の神リンローンは屍體を食ひ盡すため蛇を降し、次いで虎を降したが何れも屍體を食ひきれず、リンローンの怒を買ひ、山野に逃散した。そこで暴風雨の神は火神を遣はし大地を焼き盡さしめた。リプロンは、之を見るや牝牛をうち殺し、その腹を割き、胃の中に潜りこみ、火勢を逃れた。胃の中で瓢箪の種子を拾ひ、水の神の命令に従ひ、之を蒔くと忽ち一條の蔓が山に向ひ、今一條の蔓が下に向ひ、今一條の蔓が木に纏ひ上に伸びた。始めの一條は枯死してしまつたが、最後の蔓はリンローンから遣はされた園丁の栽培により充分生育し、今まで見たこともない大きな瓢箪を實らした。リンローンは青天の神サオパンを遣はし、大地を人間に棲みよくし、水を乾さしめ、また雷電を降して瓢箪を割らしめた。實の中におた人間は穴から這ひ出て新しい土地の生息者となり、陸續として割れる瓢箪の實から川の水、鳥獸、有用植物の類が出現したと云ふ。(Frazer, Folklore in the Old Testament, I, pp. 199-203)

ビルマの北方シャン・ステートのセンキの年代記によると次の如き卵生傳説が傳へられてゐる。昔ノーンプット湖岸に老夫婦が住み、クンアイと云ふ息子を持つてゐた。ナガの娘が人間の姿でその妻となり、水底で暮してゐたが、或日見てはならぬと云ふ禁忌に背いてクンアイは妻の族の龍の姿なるをかいまみ、望郷の念に驅られ、逸に父母の許に歸る。一緒に來た龍女は岸に卵を生んで水中に歸つてしまふ。卵から生れたテンカム（金枯葉）と云はれる子が雲南の總督の娘と結婚し、ヤン・マカの王となると云ふ筋である。（拙著『印度支那の民族と文化』三二一—三二二頁）

六

南シナの原住民たる苗族に就ても次の如き事實が報告されてゐる。貴州省の黒苗の間には嚴重な家族的禁忌が存してゐる。Tien と云ふ姓のものは犬を食さない。會つて出産後母が死し、生れた女子が乳なくして困つてゐた際、牝犬が之に乳を與へて育てた故、子孫は犬の肉を禁忌するのだと云ふ。また Pan と云ふ姓は牛を食はぬ。これは會つて其族員が Tien の女子を嫁に貰はんとした所、九度斷られた。それでもたつて要求した所、條件として祖先の祭に犠牲とする牛を食してはならぬと云ふ事が提起され、爾後 Pan 姓のものは其禁忌を守り、牛を一切食さぬのだと云ふ。(Schotter, Notes ethnographiques sur les tribus de Kouytcheou (Chine), Anthropos, VI, S. 321)

一體苗族はタイと密接な關係を有するも一方モン・クメール族とも會つて接觸したらしく太古の東アジア住民の遺裔であるが、彼等の古代神話を見ると極めて興味あるものがある。鳥居龍藏博士が採集した安順青苗の神話によると次の如き型のものがある。太古兄妹一人あり、互に夫婦となり、一樹を生み、この樹より桃、楊の木が生まれ、其植物の種類

により各々之を姓となした。桃樹は桃の姓を名乗り、楊樹は楊の姓を名乗つた。桃、楊等は後分れて九種となり、此九種互に夫婦となり、今日見るが如き苗族を形成した。⁽¹⁾後、人口殖え二山の間に居住してゐたが、二山の間に存する大いなる凹みの中に落ち入り、困却せる時に天上より一羽の鷹來り、之を救出した。これより苗族は四方に流傳するに至つたが、彼等は今日も鷹を神鳥として其恩を謝し之を祭つてゐる云々。

此苗族の植物に起源し、植物の名によつて命名されたといふ所傳と、比較さるべきはセマン族の命名法である。彼等はその生れた所がココ椰子の本、又はそばにあれば「ココ椰子」と名附けられ、ドリアン樹の本又はそばにあれば「ドリアン」と名附けられる。此名のもとになつた樹木の外に別に生誕の原因となつた樹木あり、生れた子は其屬の樹木全體を傷けてはならず、その實を食してもいけない。子供が生れた際父はその誕生木に刻み目をつける。此木が枯れると持主は死ぬと信ぜられてゐる。(スキード・プラグデ^ス、前引書、三、四、二二五頁)

なほ前引苗族の神話に於て人口が殖えてから二山の間の凹みに落ちたと云ふのは如何にも辻棲あはぬ話であるが、恐らくその間に苗の他の部落に於て行はれてゐる例の洪水傳説が介在し、之が省略して傳承せられたものであらう。即ち花苗の間に於て採録せられた開闢傳説は次の如き形式のものである。

二人の兄弟が毎日田を耕してゐると次の朝には舊の如くなる。そこで夜番してゐると一人の老女が天から下りて来て地を舊の如く均してしまふ。二人で之を捕へ、その理由をたゞすと、近い中に大洪水が來るので無用だからと云ふ。兄の方は老婆を捕へ殺さんとしたが弟がなだめて之を許してやる。恩に感じて老婆は弟には大きな木の鼓を、兄には鐵の鼓を作つて中に隠れることを勧める。弟は大木を切り倒し中をうつろにし、上に皮を張つてその中に妹と一緒に

這入る。果して大洪水が廿日ばかり續き、兄は鐵の鼓の中に溺れ死んだが、弟の這入つた木の鼓は水上に漂つて中々沈まない。天の神は枝の出た木の鼓を角のある怪物と見誤り、畏怖し、龍、蜥蜴その他に命じ、水をひかしめる。かくて滅水したが木の鼓は峻しい危険な絶壁に附著して虚空に懸り、中に這入つた弟妹は途方に暮れる。幸ひその木に鷹が巣つくつたので計をもつてその援助を求め、無事に地上に降りるに成功する。

云ふ筋である。即ち此傳説中にあるやうに大洪水の話を介在せしむると苗族の祖先が山の間に囲みに落入り、鷹に救はれる挿話が了解される。(S. R. Clarke, *Among the Tribes in Southwest China*, London, 1911, p. 44).

部族の祖先が大洪水、或は大火災を逃れて生き残つた兄妹の子孫であると云ふ傳承は南シナからインドシナにかけての各部族の間に弘く行はれ、その場合兄妹の匿れた容物を瓠とする傳承が極めて多い。例へば鴉雀苗 Ya-chio Miao に於ては大きな葫蘆の中に隠れて大水中を漂蕩したと云ふ傳へになり (Clarke, ibid., pp. 54—55)、芮氏の採集した湖南省西境の苗族の間に行はれる洪水傳説に於ては兄妹が黃瓜、葫蘆、又は仙瓜にはいりて大洪水から救はれた筋となつてゐる。(黃逸夫「苗族洪水故事與伏羲女媧的傳説」『人類學集刊』卷一期)

佛領インドシナ東京地方の民族のことを記したアバディーは苗族の洪水傳説を叙し、「大災厄から生き残つた兄妹二人が相婚して瓠を生み、その種子から人類が發生する筋である。」と述べてゐる。(M. Abadie, *Les Races du Haut-Tonkin*, Paris, 1927. p. 168)

佛印東京の山地シャム・ビルマの北部國境から南シナの山間に棲む蠻^{ヤン}一名猺族の間にも之と同種の云ひ傳へがある。蠻の間の洪水傳説、並び犬祖傳説に就いては別に記述することにして此處にはたゞ結論としてその犬祖先を語る槃瓠傳

説は單純な動物トーテミズムで説明出來ず、瓠の如き中空ろな圓形物が水中を漂ひ、その中から祖先が發祥したと云ふ傳説と一脈の關聯があり、恐らく一個の複合神話であり、その中から動物祖先から來た要素もあれば植物祖先から由來した要素もあり、或は後者の方が部族の古い信仰を語るものではないかと云ふことを述べるに止める。⁽⁸⁾

植物と水物との關係を信じた同様の例として雲南永昌郡に古代に住んでゐた哀牢夷の傳説を擧げことが出来る。此傳説の研究も後に別に論するが、此傳承に於ても龍は沈木と云ふ形に於て表現され、水中の精靈と植物との密接な關聯が推測される。結局、水中の竹の節の中から祖先が發祥すると云ふ夜郎國の竹王傳説も此等の物語と一聯の傳承で、神聖な水界から祖靈が植物性のものに宿つて漂ひ示現すると云ふ信仰と密接な關聯を持つてゐるらしい。

此等の原住民を壓迫して今日の大をなしたシナ民族がトーテミズムを持つてゐたかどうかは難しい問題であるが、シナ文化が地域的種族的に異なる幾多の文化を包攝して複雑な相貌を呈してゐることは否み得ざる所であり、その中にトーテミズム的信仰の痕跡が見受けられても不思議はないのである。此問題に就ては、既に「史學」第一卷第一、二號に所見を述べしことあり、更に其後も諸學者が、之に關する高見を公けにされてゐる。しかし上代シナの文献の中にはトーテミズムの明白なる痕跡は、極めて稀薄であり、シナ人がトーテミズム時代を経過したと斷言することは甚だ難しい。然しながらこれはトーテミズムの發生すべき時代はシナ民族の遠き過去に於て経過せるものであり、有史時代に入れる彼等は既に農業民族として自然神の觀念を有し、高度なる文化を有してをつたためであらう。吾人はたゞ姓になど關する傳説神話の中に残れる僅少なる古き生活の化石を探し求め得ることによつて満足しなければならぬのである。

然したとひシナ民族プロパーにトーテミズムが存しないにしても北部又は西北からシナに侵入しシナ民族と同化した

種族中にトーテム氏族を有した部族の混入したこと考へられ、之がシナ古代姓の中の動物姓の存在と一脈の聯關係あることも想像出来るのである。また今一つ考へられるのは、シナ民族が江淮平原に進出し、東南アジアの原住民と同化した際、モンクエルその他の種族のトーテミズム的思想、ことに植物を崇拜する信仰を取り入れるに至つたことである。

伊尹の空桑の中より生れた傳説を始め、果實その他植物より出生する説話がシナに行はれてをるものさういふ原始思想の遺存と考へられる。例へばシナに極めて分布廣い孟姜女の傳説も江蘇浙江地方の傳へによると孟姜女は葫蘆、冬瓜、南瓜中より生れたと云ふことなり(白占友編『孟姜女的故事考』八頁)。またその夫たりし范杞郎も范家の瓜蔓が伸びて隣家の杞家に至り、重さ十餘斤の實を結んだので之を割ると中から赤兒が生れ、兩家の名をとつて范杞郎と名づけたのであると云ふ(陸豐「民間孟姜女傳説之一」、『民俗』八十期)。更に樹木の癭より子供の出生した話も黃仲琴の「檳榔女」(『民俗』四十三期民國十八年)に宋紹興間馬純の撰した陶朱新錄を引き次の如き例を擧げてをる。交州の峒中に檳榔木あり、忽ち癭を生じ、漸く大となり俄かに其中に啼聲を聞いた。峒丁因つて割つて之を視ると一兒を得、逸に之を家に養つた。長ずるに及び、乃ち一美婦人となり、婉として神仙の如くである。即ち之を峒主に献じたが交人之を求め、與へなかつたので兵を擧げて峒を伐ち、之を滅し其女を保つて去り、號して之を檳榔女と云つたとある。此等の説話が東南アジアに曾つて擴つてゐた原始文化の名残りであることは推察される。

要するにシナ古代に於けるトーテミズムの性質に就ては明確な判断を下すことは今日なほ出來ぬか、恐らくかういふ後世の資料より類推して多少とも動物及び植物トーテミズムの痕跡が存在したことは想定なし得るのではないかと思ふ。殊にこの東亞の沃野に早くより農業にいそしんだ彼等が動物の外に植物トーテミズムの保持者であつたことを推定

することは必ずしも大膽な假説ではなしであらうと思ふ。

以上縷々述べ來りし如く東南アジアのオーストロアジア語族、及チベット・ビルマ語族、タイ・シャン語族の間にトーテミズム的習俗の痕跡認められ、そのトーテミズムの中には植物の要素、例へば瓠、南瓜、竹の類の認められること、之と相伴つて此種の植物中より人祖の現出する説話の弘く分布することは明白である。此種の説話が果してプシルスキー氏の云ふ様にヴェジエタリズムとして假稱せられる信仰體系より生れたか、はたまた一種の植物トーテミズムの痕跡であるか議論は分れるけれど自分は輕々に此問題に結論を提起することを避け、たゞ我國の竹取物語に於てその發端を形づくる竹中生誕、又はその異傳たる鶯卵より生れたと云ふ説話は之を印度やシナの後世説話の翻案と見る必要なく、東南アジア固有のものと見て差支へないと主張したいのであり、印度やシナの此種の説話の方が却て多分に東南アジア原初文化、オーストロアジア、チベット、ビルマ、タイ・シャン等の種族により代表される前時代文化の影響を蒙つたと推定されるのである。

註(1) 挙者『印度支那の民族と文化』(昭和十七年十一月、一九五一年三月)

(2) 柳田國男「竹取翁考」「國語國文」四卷一號、昭和九年一月、三品彰英「かぐや姫の本質に就て」(「日本文學」二十六、前人刊、昭和七年二月、「日本神話傳説の研究」一五〇—一九一頁、昭和十八年)

(3) 挙著『日本神話の研究』八一頁、マイの話に、象の國の王女と婚し子までなした男が木の芽を皿につけてはならぬと云ふタブーを破り、妻女を失ふ筋があるが、之は植物トーテムと動物トーテムとが相結合してゐる部族の存在を示す一例であつて、此ペセイの物語と對應して興味がある。

(4) Panchanan Mitra, Prehistoric India, its place in the world's Cultures, Calcutta, 1927.

竹中生誕譚の源流 (松本信廣)

(171) 四五

(5) チンの傳説によると全人類はリンユ Hinyu と呼ぶ女の生んだ百一卵から孵化したのであり、チン人は一番最後の卵から生まれ、母に最も愛されたがその他行中に世界は皆兄弟に分配され、チン人の所有にはたゞ荒涼たる山のみが残されたのであるといふ。(Shway Yoe, *The Burman, his Life and Nations*, London, 1910, p. 443)

(6) 廣西ロロ族の間に於て祖龜の上に竹木兩片一つは短く一つは長きを安置し、長い方を神公、短き方を神母と爲し、その由來を説いて次の如く云ふ。昔、竹の大變よく茂り、太いのが生え、中に人馬弓箭を多く藏してゐた。竹が充分生育した時、之を破り、出でて天下を取らんとしたのである。たまたまシナの皇帝が此處を通り、その變興のながえが折れたので竹を切つて之を作らんとした所、中から人馬の出てくるのを見て大いに驚き、林を焚いてしまひ、人馬は盡く死し、其首領は煙に乗つて天に去り、また歸らぬ。そのためロロ人は竹を祖堂に奉じて朝夕禮拜するのだと云ふ。(劉錫蕃、「嶺表紀鑑」二九八頁)

(7) 今黔苗自らその祖先を述べて則ち謂ふ、昔山巖が爆裂し、その裂口より男女二人が出で、夫婦となり、九子を生んだ、その九子が門前の九樹を以て姓となし、その後子孫繁榮し、岐れて九種苗人となつた。(「嶺表紀鑑」六、七頁) 此話は鳥居博士の苗族調査報告の記述と相補足する。

(8) 此論文は數年前の脱稿にかかり、最近の諸論文を利用してゐない。たとへば中國でも凌純聲「畬民圖騰文化的研究」(歴史語言研究所集刊、十六本、一九四七)、聞一多「伏羲考」(聞一多全集、一、一九四四年)等の研究が出ていろいろの新見解が述べられてゐる。これらに就てはまた次の機會に觸れてみたい。

寄贈交換雑誌目録

史學雜誌 六〇ノ六—一〇 史學會
史林 三四ノ三 史學研究會
史淵 四七、四八 九州史學會

社會經濟史學 十七ノ三、四 社會經濟史學會
西洋史學 九十一 東方學會
人文研究 二ノ六—一〇 大阪市立大學文學會
西日本史學 七、八 西日本史學會